長崎：映画事始め
― 芝居小屋から活動写真館へ ―

山 川 欣 也

Early Movie Theatres in Nagasaki

YAMAKAWA, Kinya

Abstract / Short Outlines（概要）

The first moving picture in Nagasaki was screened by the cinématographe method. The date and time was May 21, 1897(Meiji 30), and the place was within the Yasaka Shrine. Though the play in huts had been accepted by the people in Nagasaki, which reflected Nagasaki's long history of plays, the number of theatrical huts screening movies gradually increased as movies became popular after that. With a change of preferences of the entertainment and the hobby of people in Nagasaki, their owners steadily began to shift their centers of gravity to the movies.

This essay aims to clarify the process of such movies becoming established as people's entertainment in Nagasaki.

キーワード

芝居小屋　　映画館　　長崎

1　はじめに

長崎はその歴史的背景として、唯一の外国に開かれた窓として、また1859年に外国へと開かれた３港の一つであったことから、いくつもの日本初の栄に浴している。それまで日本にはなかったものが長崎に持ち込まれ、日本初の洋風食堂、洋風住宅、日本初のテニスコート、ビリヤード、初めて汽車が走った、最初の株式会社（亀山社中）等、さまざまな日本初が記録されている。しかしながら、映画（日本に持ち込まれた頃には、自動寫眞とか、自動幻燈などと呼称されたが、一般的には＜活動写真＞(1)に落ち着いた）もまた外国から日本に持ち込まれた舶来品であるが、残念ながら、長崎は日本初の栄に浴することは出来なかった。

とはいえ、映画館のスクリーンで鑑賞する現在のスタイルで映画が一般公開されてから、およそ３カ月後に長崎での映画上映が実現している。「シ子マトグラフ」(cinematograph)と記された広告で宣伝された。(2)

現在私たちが観ている映画の一般的な鑑賞スタイルの嚆矢は、1895年12月にフランス、パリのグランカフェで、リュミエール兄弟によって行われた上映スタイル（スクリーン投射式）とされている（シネマトグラフ(cinematograph)と呼ばれた）。当時、今ひとつの鑑賞スタイルとして、トマス･A･エジソンによる発明スタイル（のぞき穴式）もあり（キネトスコープ(kinetoscope)と呼ばれた）、アメリカではペニーアーケードあるいはパーラーという、現在のゲーム･センターのような場所に設置され、当

初は人気を集めていた。その後エジソンは、スクリーン投射式のヴァイタスコープを1896年4月に発表し、リュミエール兄弟によるシネマトグラフと世界市場を競ったのである。

日本では、まずキネトスコープが、1896（明治29）年11月に、神戸の神港倶楽部で一般公開された。翌12月には大阪難波の南地演舞場で興行が打たれている。シネマトグラフは1897（明治30）年２月15日から南地演舞場で一般公開され、次いでヴァイタスコープは1897（明治30）年２月22日から大阪新町演舞場で最初に一般公開されている。(3)日本でも、映画の黎明期において、このヴァイタスコープとシネマトグラフというスクリーン投射式装置をめぐっていくつかのライバル業者が覇権を争うことになった。大阪、京都、神戸からスタートした日本での映画史は、こうした覇権争いをともないながら、東京、横浜はもちろん、日本各地へと拡大し、娯楽として広く受け入れられていった。長崎初の映画は、南地演舞場に遅れること僅か３カ月後、シネマトグラフでの上映だったことがわかっている。

こうした日本における映画興行がはじまったのはいつか、それはだれによってはじめられたのかといった研究は、田中や塚田をはじめとする調査によって明らかにされてきたが、では日本全体に急速に映画が拡大していく過程、換言すれば各地方における映画興行の定着に関しては必ずしも明らかになっているとは言いがたい。活弁による映画興行の研究は進んできた一方で、映画黎明期における地方の映画館自体の興行形態についての調査研究はほぼ未開拓といえる。映画は当初から映画館で上映されていたわけではなく、芝居小屋など何らかの施設に間借りした仮設興行といったスタイルだったが、それが「軒を貸して母屋を取られる」といった情況へと急展開した。(4)

そこで、映画という新たな技術の到来によって、芝居小屋や見世物小屋における一般大衆の娯楽が映画館という装置に娯楽の場を求めるようになる過程を調査し、映画黎明期における地方の映画館自体の興行形態を具体的に明にしてみたい。芝居興行が盛んであった地方都市はその事例研究として適当であると考えられ、特に一時「歌舞伎町」なる地名が存在し、上方江戸の歌舞伎一座がわざわざ足を運んで興行していた長崎を対象としてまずは調査をはじめることにしたい。

本稿は、こうした映画が、娯楽として、長崎に定着していく過程を明らかにしていくことを目的にするものである。まずは、映画以前に人々に親しまれていた娯楽である芝居小屋の事情から話を進めていく。

２　芝居小屋事情

長崎のおける芝居事情に関しては、若浦重雄『長崎の歌舞伎-長崎芝居年代記　第一集』によって詳細に調査されており、主にこれに依拠しつつ述べておきたい。(5)「出雲の阿国」にはじまる日本の「芝居：歌舞伎」の影響は及んでいたようである。例えば、当時の来日外国人の見聞録に女歌舞伎の芝居の記述があり、長崎では、キリスト教禁令以前は、さまざまなキリスト教行事での宗教劇などが盛んに催され、少年による舞踏もあったようである。しかし、禁令以降はさすがにキリスト教宗教劇はなくなり、また、1629（寛永６）年に「女舞、女歌舞伎、女浄瑠璃等一切」禁止されて以降、若衆歌舞伎が流行ったようであり、東古川町あたりに、「歌舞伎町」、「新歌舞伎町」なる地名があったことから芝居事情はかなり隆盛だったことがうかがえる。(6)ただ、その後かかる町名は廃止され、芝居興行が場所の指定（早水氏の拝領地）や回数の制限があるなど、次第に長崎における芝居は衰退し、「ただ長崎人の演劇は諏訪神事の本踊にその系統を遺す位のことであった。上方江戸あたりで俳優であったもの、上方江戸あたりより長崎に下った役者のうちで色々の事情ありて居残った者、或は諏訪神事の

本踊に参加して手腕を錬磨した者などが踊子の師匠となりて伝統に踊子を養成してゆくのであった」。(7)

では、長崎では芝居興行は全く停滞していたかといえば必ずしもそうとはいえず、何かの損害を受けた建造物などの修復助成を目的とした芝居興行や、長崎に下った上方江戸の歌舞伎一座の興行は行われており、歌舞伎にかまけて「仕事をなまけたり、風紀を乱すことのないよう」といったお触れを出しているほど、むしろ芝居は潜航して浸透していた。

ようやく、芝居が長崎の表舞台に立った。1828（文政11）年、長崎の興行を長らく一手に引き受けていたと言える早水氏が、上方の興行師から常設の芝居小屋建設の相談を受けて、「快諾」したことによって、俗に「芝居の丁」と呼ばれた早水氏の拝領地（八幡町）に「八幡座」が誕生した。それまでの芝居興行は、掘立「小屋の周囲に竹矢來を設け、莚などを下げた」とても粗末な造りの中で行われ、舞台などはなく、観衆は筵敷きの桟敷土間にそのまま座って見物した。そこに常設の芝居小屋が出来たのである。こうして上方江戸の名優が芝居を打ち大評判をとる常設小屋となった。

「八幡座」はその後、1865（慶応元）年12月に永久に劇場設置が認可され、明治に入り1888（明治21）年11月に一度事業は中止になり建物が撤去されているが、1897（明治30）年11月に再び設立許可を受け興行を開始、1943（昭和18）年に「長崎歌舞伎座」と改称するも、1947（昭和22）年4月の失火によって廃座となった。「八幡座」は、芝居小屋として芝居一筋を貫き、数々の歌舞伎一座の興行を打った歴史を有した。(8)

明治期に入って、長崎にはそれまで以上に諸外国の船の出入りが増加し、さまざまな外国人居住者も増え、「文化輸入の門戸である長崎に、外国人への娯楽慰安として十分鑑賞できる完全な劇場が必要、との当時の県令石田英吉の提唱をうけた帯谷宗七は有志を募り、資本金３万円で「瓊浦劇場株式会社」を設立、1890（明治23）年11月「舞鶴座」（新大工町76～81番地の官営払下げ地）と名付けられた劇場が大阪歌舞伎市川右団次一座による柿葺落し興行でスタートした。こうして「舞鶴座」が暫く「八幡座」の穴埋めの役割を果たすことになった。1915（大正４）年９月に「長崎劇場」と改称、1917（大正６）年には三菱合資株式会社の福利厚生施設「中島会館」となり、1936（昭和11）年６月道路・区画整理のため取り壊される運命を辿った。(9)

もう１軒触れておきたい。明治初年頃から榎津町の有志が設立していた寄席が1895（明治28）年火災に見舞われ、その後再建し寄席を設けたが経営者が替わり、1903（明治36）年劇場として許可をうけ、さらに経営者が替わり1921（大正10）年から1922（大正11）年にかけ興行しながら増築や模様替えを行い、大阪歌舞伎一座などの芝居興行のみならず、「浪花節義太夫其の他諸種の演芸四時絶ふることなし」とされたが、1930（昭和５）年６月「中座」と改称し、帝キネ・新興シネマ映画の常設映画館へと転換、敗戦とともに廃座となった。(10)

その他の主な芝居小屋に関して以下にまとめて記す。(11)

「亀岡座」は1909（明治42）年10月、飽の浦町に小芝居（大歌舞伎ではないという意）小屋として開場したが、1913（大正２）年12月に要町（９～11番地）に移転「永久座」と改称して出島地区の唯一の娯楽場となるが、敗戦とともに1945（昭和20）年廃座になった。

「南座」は1909（明治42）年、本石灰町24番地の「町田観商場」の一部を賃貸寄席として「満知多座」が開場し、翌年新築落成し、博多仁和可一座が興行をうった。1915（大正４）年11月「三七三座」と改称、東京大歌舞伎が興行可能な模様替えを行い、1916（大正５）年5月に尾上菊五郎、板東三津五

郎一座で柿葺落し。1919（大正8）年に「南座」と再び改称、本石灰町６番地に改築して開場、大阪歌舞伎の片岡仁左衛門一座が柿葺落しとなった。大歌舞伎興行が多かったようであるが、1943（昭和17）年10月、戦争の只中で大阪梅田映画劇場直営になり、歌舞伎興行から映画興行主体へと移行し、戦後は「長崎宝塚劇場」として洋画常設館として親しまれた。

「宮古座」は1908（明治41）年９月、大黒町（67～68番地）監獄跡に開場したが、実は後述される八坂神社に1899（明治32）年「祇園座」と称される賃貸寄席が「大黒座」と改称され移築したものである。この「大黒座」が1916（大正５）年10月に「宮古座」と改称されたのである。ただ、劇場名が頻繁に変わり、いつ頃から常設映画館に変更されたのかはわからないが、少なくとも1930（昭和５）年版の『日本映画事業総覧』には「宮古キネマ」と記載されていることから、この時点で既に芝居小屋ではなくなっており、この後、河合プロ直営の映画館（東亜劇場）となり、原爆で焼失した。

その他、賃貸寄席、演芸場として「七楽座」（大浦上田町）、「布袋座」（今町）、「崎陽館」（西濱町）、「喜楽座」（東濱町）、「大正館」（本古川町）など、町のあちこちにみられ、人々に娯楽を提供していた。

３　長崎での活動写真館の定着

（『鎮西日報』1897（明治30）年5月21日）

◎シ子マトグラフ興行

此シネマトグラフハ有名ナル佛蘭西ノ發明ニシテ世界萬國至ル處場采ヲ博セサルナク各國帝王ヨリ勲章下賜ノ榮ヲ辱ミ其寫眞大家ノ其寫影ハ各國皇帝皇后皇太子等ノ及行幸ハ國又宮殿或ハ海陸軍ノ運動ノ眞像ハ各國皇族貴顯人士ノ肖名ナル場ノ模樣他各國ニ於テ此機械ハ新奇學問ニシテ此紙ハ新奇ナル工夫ニ悉サレ而シテ筆ノ大發明ニシテ耐會事物ノ千樣萬態ノ活動寫眞ハ實ニ驚ク可キ所ノ最面白キ術的ノ萬國ニ活動シ所ノ實況ヲ寫シ出シ人ノ目ニ觀セシムモノナリ

一市ノ景況ハ實ニ妙ノ奇ナレハ不思議ノ外ナシ云ヘ人ノ歩行車馬ノ往來ハ微細ニ令ハ明ニ寫シ出シ人ノ喫煙ノ狀態ハ實ニ微細ニ至リテハ洛水ノ飛揚ハ亦明ニ寫シ出シ殆ト眞ニ迫ル能ハサルノ感アリ

是ハ技師シエレール氏カ我國ニ齎來ル西京ニ於テ大ニ衆庶ノ好評ヲ得タルモノナリ今般招請シテ左ノ所ニ於テ千百色以上ノ電氣ヲ設ケ古新貳千無比ノ光ヲ得タルモノナリ

興行場
八坂神社境内ニ於テ來廿一日ヨリ毎日午後五時ヨリ十一時迄
請元
明治卅年五月

ソノ技術ナシハ老幼男女ニ論ナク陸續來觀アラン希望ス

興行ハ本技師ハ最大發ニ係ル致候ハ新ク

（『鎮西日報』1897（明治30）年5月21日）

長崎で最初に映画が上映されたのは1897（明治30）年５月21日、場所は八坂神社境内、シネマトグラフ方式によるものであった。その日の『鎮西日報』には右掲のように客寄せの広告が掲載されており、翌日にも同じ広告が載っている。この時点で、この広告を目にした長崎の人々の中に、どれくらい「シ子マトグラフ」(cinematograph)　がどんなものかをわかっていた人がいたのか、どれくらいの人々がこの興行に出かけたのかを詳らかに出来ない。というのも、上映作品は大いに喝采を博したとの記事はあるものの、この興行が大入り盛況のうちに終了したといった記事が見当たらない。また、興行は５月31日終了予定が６月６日まで延長となったのだが、これは好評による延長ではなく、広告には「出船ノ都合」とあり、さらに観覧料を半額（10銭）にするとされているのである。なお、当時、長崎で発行されていた英字新聞 ”*Nagasaki Shipping List*”（May 25,1897）でも、八坂神社での長崎初興行の記事と広告が載せられており、注目されていたことがうかがえる。(12)

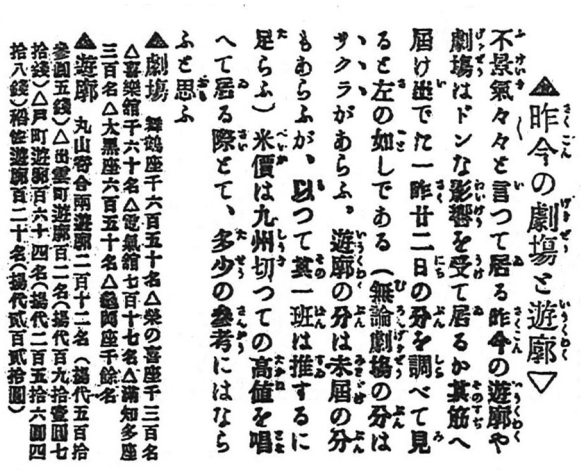
長崎最初の映画上映が5月であったことは、既述のように日本初ではないものの、比較的早い段階での興行だったと言えるが、この興行がどのような事情によって、誰によって行われたかは明確ではない。明らかになっては困る事情でもあるのか、上掲の広告では「請元」としか記載されていないので興行主が不明なのである。ただ、記事の中に「是ハ技師シエレール氏カ」という記述があり、この「技師シエレール」とは、日本に初めてシネマトグラフを持ち込んだ稲畑勝太郎と一緒にフランスから来日した、リュミエール商会の映写・撮影技師コンスタン・ジレルのことではないかと考えられる。また、「西京ニ於テ大ニ衆庶の好評ヲ得タルモノナリ」の「西京」とは、大阪及京都を指しているように思われる。ジレルは、1897（明治30）年１月９日に来日、シネマトグラフ興行のお雇い外国人として活動している（申請は3月まで）。シネマトグラフの活動写真は、大阪の後、５台の装置を使って各地

方での一般公開に廻された。(13)ジレルは10月中旬頃まで日本に滞在し撮影のため各地を訪れているようであり、撮影と興行を兼ねて地方興行に廻った際、長崎での興行に携わったのかもしれないが、今少し資料を渉猟する必要がある。(14)

その後、長崎での映画上映の記事は、同年の11月になってようやく『鎮西日報』で確認することができる。それは「栄之喜座」の興行に関する短い記事で、「榎津町同座にては寫眞活動西洋奇術大幻灯今晩より興行」とあり、活動写真を芝居小屋でかける興行をうつようになった嚆矢と言えそうである。(15)では、「栄之喜座」での本興行はシネマトグラフかヴァイタグラフ、いずれで行われたのであろうか。『新長崎年表　下』によれば、「この年（筆者注:1897（明治30）年）駒田好洋がヴァイタスコープ（活動写真）を長崎に於て初めて興行」とある。(16)本年表には、同年５月のシネマトグラフ興行に触れられていないので、本年表の記述が長崎における映画の初興行と思われがちであるが、この記述はヴァイタスコープ興行が初めてだったと解すべきであろう。本興行を行った駒田好洋は、ヴァイタスコープを携えて全国巡回映画興行を行っており、長崎では「栄之喜座」で興行を行った記録があった。ただ、駒田好洋の巡業隊は、予告宣伝や彼自身のブラスバンドを率いて町を練り歩き派手な興行宣伝をかけたとされるが、少なくとも『鎮西日報』の記事ではこれを確認出来ないので、さらに詳細を詰めたい。(17)

既述した芝居小屋の中にも、演芸や見世物興行、寄席興行の合間に活動写真を上映する小屋が増え、長崎の人々の娯楽や趣味の嗜好の変化に合わせるように、芝居小屋、そして興行主たちは次第に活動写真に重心をシフトし始めたのである。『長崎市制五十年史』には、市制が施行された頃（1889（明治22）年頃）の芝居環境に触れられており、東京や大阪の名優は必ず「遠く下って長崎」での舞台に立ったものであり、「博多とともに長崎は書入場所」であったにもかかわらず、博多にその地位を奪われてしまっている。曰く、劇場といえるものは「八幡座」のみであると嘆き、1890（明治23）年になってようやく「舞鶴座」が完成した。ちなみに、その際居留地外国人が舞台の引幕を贈呈したそうである。その後、大小の芝居小屋が並立して活況を見せたように思われたが、活動写真の影響を受けた芝居小屋環境にまたも「栄之喜座、満知多座（みなみ座）、永久座、宮古座、七楽座等が開かれ、布袋座、千鳥座、祇園座などの寄席も出来たが、活動写真に押されて閉鎖し、今は八幡座、みなみ座、永久座、七楽座の四つのみ」だとの記述がある。(18)もちろん、芝居観客が活動写真へと移ってしまったわけではなく、例えば、1912（明治45）年６月22日の『東洋日の出新聞』では、芝居小屋や活動写真館の観客数、遊郭の客をたずねた結果を記事にしている。それによれば右の通りだったという。当時の長崎の人口は、おおよそ15万４千人で、24人に１人が足を運んでいたようである。

『東洋日の出新聞』1912（明治45）年6月22日


▲昨今の劇場と遊廓▽
不景氣々々と言つて居る昨今の遊廓や劇場はドンな影響を受て居るか其筋へ屆け出でた一昨廿二日の分を調べて見ると左の如しである（無論劇場の分はサクラがあらふ、遊廓の分は未屆の分もあらふが、以つて其一班は推するに足らふ）米價は九州切つての高値を唱へて居る際とて、多少の參考にはならふと思ふ
▲劇場　舞鶴座千六百五十名△榮の喜座千三百名△喜樂館千六十名△電氣館七百十七名△滿知多座三百名△大黑座六百五十名△龜岡座千餘名
▲遊廓　丸山寄合兩遊廓二百十二名（揚代五百拾參圓五錢）△出雲町遊廓百二名（揚代百九拾壹圓七拾錢）△戸町遊廓百六十四名（揚代二百五拾六圓四拾八錢）稻佐遊廓百二十名（揚代貳百貳拾圓）

実際、どうであったのか。「栄之喜座」や「宮古座」は徐々に活動写真も上映する小屋へと既にシフトしており、「千鳥座」は、1907（明治40）年12月、西濱町新地通りに寄席芝居小屋として開場し初演は文楽興行を行っていたが、1910（明治43）年８月には、長崎初（九州初）の常設活動写真館「電気館」として営業を開始した。つまり芝居小屋

ではなく映画館になった。さらに、画期的なことに、当初から常設活動写真館として1915（大正４）年12月に「黄金館」が旭町に開業する。そして、1911（明治44）年には「喜楽座」が「喜楽館」という常設活動写真館となった。本古川町の「大正館」も後に1921（大正９）年４月、松竹キネマ系列の常設活動写真館「松竹館」となり、西濱町の「崎陽館」は1924（大正12）年10月にやはり松竹キネマ系列の常設活動写真館「第二松竹座」として営業を始めた。映画産業が人々の娯楽として成立しつつあった、というより既にそうなっていたと言える。

映写装置自体が舶来品であるから、上映される映画も輸入作品であり、作品が輸入され続けなければ新作はいつかはなくなってしまう。新しい作品を日本で制作しようとなるのは当然で、早い段階から制作に取りかかっていたようである。『日本劇映画総目録』によれば、最初の映画は、1899（明治32）年に、ヴァイタスコープの宣伝を担った広告代理店広目屋が撮った100尺ほどの「ピストル強盗清水定吉」とされている。1900（明治33）年には日本率先活動写真会が制作した「二人道成寺」など４本がリストアップされ、1903（明治36）年には定説的には最初の日本映画とされる「紅葉狩」が大阪歌舞伎座で公開上映されている（実際の撮影は1899（明治32）年11月）。本作品は好評で、東京歌舞伎座でも26日間にわたり上映されたという。(19)

こうした映画に取り上げられた題材は、歌舞伎の演し物であり、映画に登場する人物も歌舞伎役者であった。「紅葉狩」には９代目市川團十郎、５代目尾上菊五郎が出演していた。実演の歌舞伎を極めて短縮化して（200尺）撮影したものだった。本映画に限らず、最初期の作品は既に芝居で親しまれていたような題材を実写で提供するものが多かったようだ。そうなると、単純に考えて、活動写真館が芝居小屋に優る。芝居の一座は大世帯で各小屋を廻る。例えば、映画は芝居が短縮されているとはいえ、また、もちろん音もないのだが、「紅葉狩」を９代目と５代目の芝居で観ることができた。(20)

映画はフィルム一つで活動写真館を廻る（まもなく活弁士という一座がこれに加わることになるのだが）。芝居小屋は大歌舞伎をかけることができるような芝居小屋を除けば、寄席や見世物、演芸に加えて活動写真をその中に加えて興行していた小屋は次第に活動写真にその軸足を移していったのは必然だったように思われる。

1920（大正８）年に作成された『長崎市地番入分割図』に、上のような劇場寄席が記されていて、地図上で場所も確認できる。常設の活動写真館が４館あり、既述の『長崎市制五十年史』によれば、「中小学生が争って観覧するので３年（筆者注:大正）春には教育界の問題となり、警察当局も厳重な取締りを行って男女席を区別したこともあり、現に中小学生の観覧を学校家庭協力して禁止制限しているが、大衆娯楽として観客は次第に増加し･･･」と記されて、活動写真館の盛況ぶりがうかがえ、娯楽としての発展期を迎えるとともに、映画空間の規制と上映される映画の規制（検閲）が次第に問題として顕在化してきた頃であった。もちろん、長崎県令第三号「演芸場及遊覧場取締り規則」（1916（大正４）年1月）にその対象として活動写真（館）が加わり、さ

らに長崎県令第四十二号「活動写真取締規則」(1920（大正８）年８月）として活動写真そのものを取締対象とした県令が出されていた。この点、映画と検閲の問題は、稿を改めて論じる機会を持ちたい。

こうして、多くの芝居小屋は活動写真館へと姿を変え、常設活動写真館は長崎市だけでなく郡部でも増加し、さらには劇映画ではなく、当時の社会背景によるニュース専門映画館も生まれるというように、娯楽としてだけでなく、またメディアとして映画産業は定着していったのである。なお、長崎県の映画館数の経年変化について、その他の九州各県や大都市などもあわせて、巻末に別表としてあげてあるので参照されたい。

４　まとめにかえて

1946（昭和21）年１月発行の『全国映画館一覧』によれば、長崎県欄には38館の映画館がリストアップされている。とはいえ、そのいずれの映画館も長崎市以外の県内映画館である。おそらく調査が行われた敗戦の年に、被爆地長崎市には少なくとも恒常的に映画を上映できるような施設がなかったことがわかる。広島市も同様であった。また、例えば、同書で富山県欄を開いてみると12館記載されているが、富山大空襲で壊滅的な被害を受けた富山市を住所とする映画館はやはり１館も記載されていない。被爆地のみならず、特に空襲の被害を受けた地方都市でも同様であったのだろう。逆に、米軍の空襲被害を受けなかった京都市や金沢市は、市内中心地所在の映画館が記載されている。

しかし、こうした都市では全く映画が上映されていなかったのかといえば、どうもそうではないようである。正確を期すと、上掲書の締切に間に合わなかったとみられ、末尾に追記として記載されている映画館がかなりの数（90館余り）に上り、その中に富山市（１館）と長崎市（２館）の映画館名を確認することが出来る。戦後の混乱期であった事情がうかがえる。ちなみに、富山市に追加された映画館は「富山東寶」、長崎市は「長崎東寶富士館」と「長崎東寶喜楽館」の２館であった。

では、両都市に追加された映画館は、リストアップされた映画館と同様な常設館と言えるかといえば疑問の余地がある。まず、既述のように壊滅的な被害にあっており、復興もままならない状況にあったこと、また「富山東寶」が設けられたのは、戦火による崩壊を免れた建造物の「大和」百貨店の６階ホールに間借りして興行が始められたことなどから、仮設館のような興行形態だったと考えられる。戦後に撮影された長崎の「電気館」の崩壊写真を見るに、「電気館」近隣にあった両映画館もかなりの被害を受けていたことは想像に難くない。

資料を求めることができた富山市を例にとると、1945（昭和20）年10月3日には、市内にあった不二越工業で焼失を免れた「不二越会館」の大ホールを映画館として開放し、松竹映画「人間同志」を嚆矢とし、以降も映画上映が行われている。また、同年末には既述のように「富山東宝劇場」が百貨店の６階にオープンし、敗戦から半年もたたない1946（昭和21）年の正月にはアメリカ映画が上映されている。同年には半年のうちに、戦前からあった「帝国館」が再建され,「中央映画劇場」（バラック建て）がオープンするなど、映画が上映される場所を上映する側も観る側も求めていたのである。(21)

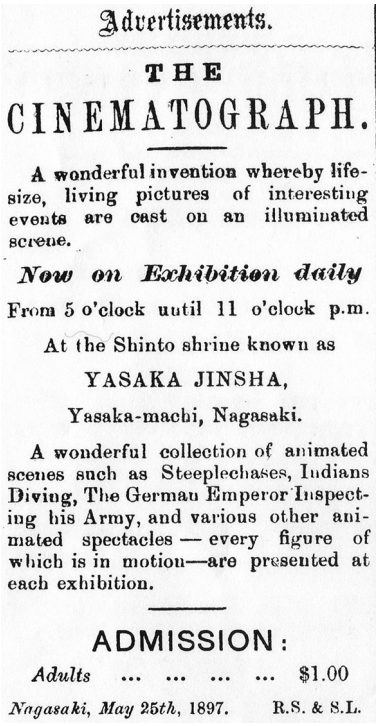
こうした映画上映が急速に進む背景として、占領軍（CIE：民間情報教育局）による民主主義の浸透と生活向上をはかるための映画政策や内務省（当時）の方針による演劇や映画などを娯楽として復活させようという政策があったが、敗戦の重い空気の中で、むしろ娯楽としての映画への人々の情熱、娯楽としての映画への渇望が映画を観る空間を生み出していたと言えそうである。(22)

その後、1950（昭和25）年には富山市では10館、広島市には18館の映画館を数えることが出来る。

(23) 人々の要求に応えるように急速に映画館数は増加し、1958（昭和33）年には国内映画観客数が最高を記録するまでに至る。しかし、これ以降これまた急速に映画観客人口と映画館数は減少の一途をたどっていくことになる。芝居小屋が映画館へ取って代わる過程と同じように、今度は映画館がＴＶに取って代わられることになるのであった。

【注】

(1) 武部好伸、『大阪「映画」事始め』（フィギュール彩）、彩流社、（2016）、97～100頁。
(2) 『鎮西日報』1897(明治30)年5月21日、4面。
(3) 武部好伸、『前掲書』、36～82頁。
(4) 田中純一郎、『日本映画発達史Ⅰ　活動写真時代』（中公文庫）、中央公論社、（1975）
塚田嘉信、『日本映画史の研究　活動写真渡来前後の事情』、現代書館、（1980）
(5) この稿、以下による。若浦重雄、『長崎の歌舞伎-長崎芝居年代記　第一集』（私家版）、（1980）、1～16頁。
また、以下のWebサイトも参考になった。
「発見！長崎の歩き方「町を賑わした！長崎の芝居史」」
（http://www.city.nagasaki.lg.jp/nagazine/hakken14032/index.html：2018年9月20日確認）
（http://www.city.nagasaki.lg.jp/nagazine/hakken14032/index1.html：2018年9月20日確認）
「映画館の記憶－長崎市をフィールドとしてー　廣瀬彩乃」
（http://d.hatena.ne.jp/shimamukwansei/20160223/1456202215：2018年9月20日確認）
(6) 唐人屋敷や阿蘭陀屋敷では外国の芝居は行われていた。時代が下がって明治維新前後には、長崎に寄港したアメリカ軍艦で「アンクルトムの小屋」の芝居が行われて興味をそそったようである。（『長崎市史　風俗編　下』、（昭和42年復刻）、（1925）、280～287頁。）
(7) 『長崎市史　風俗編　下』、（昭和42年復刻）、（1925）、263～270頁。
(8) 若浦重雄、『前掲書』、23頁。
(9) 「舞鶴座」にいては以下の依るところ大である。帯谷重則、『帯谷宗七伝』（私家版）、（1999）。また、若浦重雄、『前掲書』、67～68頁。
(10) 若浦重雄、『前掲書』、18～19、93頁。長崎市小学校職員会、『明治維新以後の長崎』（昭和48年復刻版）、名著出版、（1925）、352頁。
(11) 若浦重雄、『前掲書』、19～20、123、129頁。長崎市小学校職員会、『明治維新以後の長崎』（昭和48年復刻版）、名著出版、（1925）、353～355頁。
(12) 『鎮西日報』1897（明治30）年５月23日、２面。『同紙』1897(明治30)年６月２日、２面。ただ、翌日（６月３日）の新聞にも同広告が出たが、そこでは「来ル五日マデ」となっている。ちなみに、10銭は現在の1500円相当で、つまり長崎最初の映画鑑賞料は3000円ほど払う必要があったことになる。当時の見世物小屋が５銭もしなかったようなので、かなりの高額だった。右のように、外国人の入場料は１ドル。(“Nagasaki Shipping List”、May 25、1897)


Advertisements.

THE
CINEMATOGRAPH.

A wonderful invention whereby life-size, living pictures of interesting events are cast on an illuminated screne.

Now on Exhibition daily

From 5 o'clock until 11 o'clock p.m.

At the Shinto shrine known as

YASAKA JINSHA,

Yasaka-machi, Nagasaki.

A wonderful collection of animated scenes such as Steeplechases, Indians Diving, The Germau Emperor Inspecting his Army, and various other animated spectacles — every figure of which is in motion—are presented at each exhibition.

ADMISSION:

Adults $1.00

Nagasaki, May 25th, 1897.　R.S. & S.L.

(13) 武部好伸、『前掲書』、74～76頁。
(14) 正式にはシネマトグラフ技師としての雇用期間は終了しているので、映写装置を回すことはできないと思われるが。（武部好伸、『前掲書』、52、67、84、110～112頁。）
(15) 『鎮西日報』1897（明治30）年11月27日、２面。
(16) 嘉村国男、『新長崎年表　下』、長崎文献社、（1976）、103頁。
(17) 田中純一郎、『日本映画発達史Ⅰ　活動写真時代』（中公文庫）、中央公論社、（1975）、94～97頁。駒田好洋については、前川公美夫編著、『頗る非常　怪人活弁士駒田好洋の巡業奇聞』、新潮社、（2008）。
(18) 『長崎市制五十年史』、長崎市、（1952）、415～416頁。
(19) 朱通祥男・永田哲朗、『日本劇映画総目録　—　明治32年から昭和20年まで』、日外アソシエーツ、（2008）
(20) 田中純一郎、『前掲書』、73～93頁。『紅葉狩』の大阪歌舞伎座での実写上映は、団十郎が休演の際に行われたということであり、実に示唆的である。
(21) 富山市の映画事情については、高沢滋人・久保勲、『とやま映画100年』、北日本新聞社、（1999）、75～79頁。
『長崎新聞』（1945年10月８日付）には、９日から「東寶喜楽館」と「中央映画劇場」は上映するとの広告があり、10月25日（10月24日付）には「長崎映画劇

場」が開館、11月10日（11月９日付）には「東寶富士館」が開館するとの広告が載せられている。劇場施設がどのような形態であったかは定かではないが、終戦後数ヶ月も待たず映画上映が再開されていたことは間違いない。

(22) 高沢・久保、『前掲書』、75～79頁。

(23) 広島市の映画館数については、柳下登志子、「広島興行場施設別略年表：戦前編」、『広島市公文書館紀要』、29（2016）、45頁。

【参考資料】

[全国の映画館に関して]

橘高広、『民衆娯楽の研究』、警眼社、（1920）

文部省普通学務局、『全国に於ける活動写真状況調査』、（1921）

石巻良夫、『欧米及び日本の映画史』、（1925）

アサヒグラフ編輯局編纂、『日本映画年鑑』、大正13-14年度、東京朝日新聞発行所、（1925）

『日本映画事業総覧』、昭和２年版、国際映画通信社、（1927）

『日本映画事業総覧』、昭和３・４年版、国際映画通信社、（1929）

『日本映画事業総覧』　昭和５年版　国際映画通信社、（1930）

『全国映画館録』、昭和５年４月現在、キネマ旬報社、（1930）

『映画事業名簿』、昭和10年下期版、活動新聞社、（1935）

『全国映画館録』、昭和11年度、キネマ旬報社、（1936）

文部省社会教育局、『興行映画調査、７』、民衆娯楽調査資料　第11号（2,4,7,9,10～15）、（1938）

日本映画協会編、『映画年鑑』、昭和17年、（1942）

日本映画協会編『映画年鑑』、昭和18年、（1943）

『全国映画館一覧』、聯合通信社、（1946）

[長崎の映画館に関して]

『長崎市地番入分割図』、大正８年版、聖文社、（1919）

長崎市小学校職員会、『明治維新以後の長崎』（昭和48年復刻版）、名著出版、（1925）

『長崎市史　風俗編　下』、（昭和42年復刻）、（1925）

『長崎市制五十年史』、長崎市、（1952）

嘉村国男、『新長崎年表　下』、長崎文献社、（1976）

若浦重雄、『長崎の歌舞伎-長崎芝居年代記　第一集』（私家版）、（1980）

『アルバム長崎百年』、長崎文献社、（1984）

『続・アルバム長崎百年』、長崎文献社、（1984）

『Album 長崎百年』、長崎文献社、（1986）

『アルバム長崎百年　戦中・戦後編』、長崎文献社、（1986）

帯谷重則、『帯谷宗七伝』（私家版）、（1999）

『新長崎市史』第3巻　近代編、長崎市史編さん委員会　（2014）

[その他]

『明治大正国勢要覧』（復刊）東洋経済新報社　1975　（1929）

『富山県史　通史編６　近代　下』、富山県、（1984）

『北日本年鑑』昭和29・30・33年、北日本新聞社、（1954･1955･1958）

『富山県図書館研究集録　45号』、富山県図書協会、（2014）
柳下登志子、「広島興行場施設別略年表：戦前編」、『広島市公文書館紀要』、29（2016）

【参考文献】

朱通祥男・永田哲朗、『日本劇映画総目録―明治32年から昭和20年まで』、日外アソシエーツ、（2008）
加藤幹郎、『映画館と観客の文化史』（中公新書）、中央公論新社、（2006）
神戸100年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会編、『神戸とシネマの一世紀』、神戸新聞総合出版センター、（1998）
佐藤忠男、『日本映画史Ⅰ　1896-1940』、岩波書店、（1995）
田中純一郎、『日本映画発達史Ⅰ　活動写真時代』（中公文庫）、中央公論社、（1975）
田中純一郎、『活動写真がやってきた』（中公文庫）、中央公論社、（1985）
田中純一郎著、本地陽彦監修、『秘録　日本の活動写真』、ワイズ出版、（2004）
塚田嘉信、『日本映画史の研究　活動写真渡来前後の事情』、現代書館、（1980）
塚田嘉信、『映画資料発掘１～７』（私家版）、（1970～1972）
高沢滋人・久保勲、『とやま映画100年』、北日本新聞社、（1999）
武部好伸、『大阪「映画」事始め』（フィギュール彩）、彩流社、（2016）
都築政昭、『シネマがやってきた　日本映画事始め』、小学館、（1995）
永嶺重敏、『怪盗ジゴマと活動写真の時代』（新潮新書）、新潮社、（2006）
堀江節子、『総曲輪物語　繁華街の記憶』、桂書房、（2006）
前川公美夫編著、『頗る非常　怪人活弁士駒田好洋の巡業奇聞』、新潮社、（2008）
御園京平＋みそのコレクション、『活辯時代』（同時代ライブラリー）、岩波書店、（1990）
吉田智恵男、『もう一つの映画史　活弁の時代』、時事通信社、（1978）
吉田喜重・山口昌男・木下直之編、『映画伝来　シネマトグラフと〈明治の日本〉』、岩波書店、（1995）
四方田犬彦、『日本映画史110年』（集英社新書）、集英社、（2014）
わかこうじ、『活動大寫眞始末記』、彩流社、（1997）
『日本映画の誕生』（講座日本映画１）、岩波書店、（1985）

※　本稿をまとめるにあたり、アートクエイク代表安元哲夫氏には、資料の提供などでたいへんお世話になりました。記して感謝申し上げる次第です。

（別表）

道府県別常設映画館数変化（1912（明治45）年から1945（昭和20）年まで）※

	1912（M45_T1）	1915（T4）	1920（T9）	1921（T10）	1924（T13）	1926（T15_S1）	1928（S3）	1930（S5）	1935（S10）	1937（S12）	1939（S14）	1941（S16）	1943（S18）	1945（S20）
長崎	2	7	7	9	10	11	14	13	16	22	34	36	53	35
東京	43	88	62	86	101	194	194	209	250	267	303	327	308（休1）	72
大阪	37	5	34	39	66	83	120	115	156	168	205	209	179（休4）	75
京都	9	13	14	19	24	33	38	45	62	72	60	69	56（休4）	41
神奈川	23	11	17	30	49	53	67	53	63	74	83	89	75	28
兵庫	-	14	14	24	32	34	51	51	67	83	92	104	99（休4）	37
静岡	3	12	20	34	28	31	39	40	54	49	100	111	66（休1）	40
富山	3	8	6	6	4	12	12	13	18	12	18	21	21	13
福岡		17	31	54	59	67	71	64	78	96	108	118	125	80
佐賀	-	3	3	5	7	8	10	9	15	15	13	15	28	26
大分	1	3	7	7	9	12	13	16	23	16	21	24	28	23
熊本	2	5	8	10	10	11	15	17	23	28	32	35	36	16
宮崎	-	2	4	4	7	6	8	8	16	13	13	16	15	11
鹿児島	2	3	4	4	5	6	7	7	9	10	11	23	19	6
沖縄	1	-	1	2	-	2	4	2	5	6	8	5	4	-
全国	164	341	470	694	808	1056	1259	1266	1835	1749	2028	2471	1970（休19）	1068

長崎での映画館数の変化を、他の道府県の変化と比較した表である。九州各県と、地方でも映画館数が比較的多い静岡県、大都市圏、並びに富山県の映画館数を以下の資料を参考として作成している。大正年間に急速に映画館数が増えていったことがわかる。また、昭和に入ってからも第二次大戦前までその数字は伸びていった。戦争中になると休館する映画館もみられるようになり、1945（昭和20）年の調査では大戦前のほぼ半数の数になっている。

※文部省普通学務局、『全国に於ける活動写真状況調査』、(1921)。アサヒグラフ編輯局編纂、『日本映画年鑑』、大正13-14年度、(1925)。『日本映画事業総覧』、昭和２年版、(1927)。『日本映画事業総覧』、昭和３・４年版、(1929)。『日本映画事業総覧』、昭和５年版、(1930)。『映画事業名簿』、昭和10年下期版、1935)。『全国映画館録』、昭和11年度、(1936)。日本映画協会編、『映画年鑑』、昭和17年、(1942)。日本映画協会編『映画年鑑』、昭和18年、(1943)。以上より作成。調査によっては数字が不確かと思えるものも散見されたが、上掲の資料の通りそのまま扱った。